

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成23年 2月 第120号 年間購読料1,000円(1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

野球応援のお国柄が介護にも

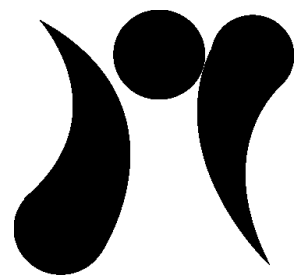
昨年11月2日の朝日新聞に『野球応援、お国柄あっていい』という投書が載りました。「米国では打者が打席に入ればベンチも客席も静まりかえる。」が「日本では打者がバットを構えたあとも大声で応援する。」米国に引っ越した日本人一家の小学生男児が、入団した野球チームの米国人監督から『日本流の声援は打者の集中をじゃまし、試合の妨げになる』と注意された事にたいして、45歳の日本人主婦が「特にプロ野球では選手に合わせた応援がある。私はこれを楽しみに球場へ足を運んでいる。ファン同士の連帯感の中、何もかも忘れてゲームに熱狂する喜び。ゲームを盛り上げるためには不可欠な要素だと私は感じている。選手も『皆さんの声援が励みになっている』と言っているように、プレーの邪魔になるとは思えない。応援方法は国ごとに違った方がはるかに楽しい」と反論。日本とアメリカとで、野球というスポーツを観戦する姿勢の違いが、見事に現われています。

アメリカの野球中継をテレビで見ても、飛んでくるボールを捕ろうとグラブ持参で内野席や外野席で陣取っているファンを数多く見受けます。投げるピッチャーと打つバッターと一体となって、ファンがボールに集中している様子が覗えます。プレーヤーの一つ一つのプレーと一体感を持つことを、野球観戦の醍醐味としている事を強く感じます。

日本では、ファン同士の連帯感の中で、何もかも忘れてゲームに熱狂して、一つ一つのプレーを見ていない観客を、飛んでくるボールから護る為に、高いネットが張られています。この日本と米国の違いを、お国柄の違い、として肯定することには少し違和感を覚えます。

スポーツ観戦の原点が、プレーヤーのベストプレーを観て、プレーヤーと一体となってスポーツを楽しむ処にあり、ベストプレーを期待する為のマナーとモラルが観客に求められるのは、世界共通だと思います。

(次ページに続く)



ゴルフの石川遼選手がパットを打つ瞬間に、カメラのシャッター音がして心が乱れ、プレーを中断した様子がテレビに映りました。パットへの集中力の邪魔をする行為は、観客としてのマナーにもモラルにも反します。

野球の観戦で、打席に入ったバッターがバットを構えた時は、バッターがボールを打つ事に神経を集中できるように見守るのが、ベストプレーを期待する観客のマナーでありモラルです。しかし日本の野球観戦では、選手のプレーを追わずに、応援に集中するファンが大勢います。選手のプレーを応援するのではなく、自分の応援行動と応援者同士の連帯感に酔い痴れています。

そして、プレーを観ない日本流の応援が、日本の高齢者の医療や介護の仕方と共通する部分を強く感じます。高齢者ご本人にとって何が大切なのかを議論する前に、家族が納得する事を優先して医療内容を決める場面が多く生じています。胃ろうや気管切開や人口呼吸器の装着について、ご本人の自然な生命の営みについての考察も議論もなく、「何時までも生きていて欲しい」との家族の想いが決定権を握ります。

人は、自然な営みとして自らの死を受止める遺伝子情報を受継ぎ、65歳を超えた高齢者は、その情報に基づく老化の態勢に入っています。高齢者ご本人が自らの遺伝子が教える最善の姿で老いと死に向き合うとき、その姿を最期まで見守り支える医療や介護で在りたい、と心より願っています。

最近、救急搬送された高齢者の死因が特定できず、検視扱いになる事例が増えています。事故や突然の発作による場合は別にして、自然な営みの中で向き合う死の可能性については、自然な生命活動の一環として受止め肯定する思想と、その思想を尊重するマナーやモラルが求められます。其れは、野球観戦における観客のマナーやモラルにも通じるものだと思います。

自然な営みとして老いと死を受止め肯定するとき、生命の誕生を自然な営みとして受止める思想につながり、懸命に生きる全ての人を応援し支える地域包括ケアの視点にもつながるものと信じます。普遍的な価値は、お国柄の違いを超えて、厳然と在るものだと確信します。

せいりょう園 渋谷 哲

ケアハウス等空き情報

＜平成23年 2月15日現在＞

《ケアハウス》

- | | | | |
|-------------|----------------------|--------------|----------|
| ・ 恵泉 | ： 1人部屋若干
： 2人部屋若干 | ・ 第二ケアハウス恵泉 | ： 1人部屋若干 |
| ・ 青山苑 | ： 1人部屋1室
： 2人部屋2室 | ・ キャッル真和 | ： 1人部屋1室 |
| ・ ケアハウスアゼリア | ： 1人部屋4室
： 2人部屋2室 | ・ シブガ 御津 | ： 1人部屋2室 |
| | | ・ サリットひまわり園 | ： 2人部屋1室 |
| | | ・ ウェルビソグ はりま | ： 1人部屋2室 |

《バリアフリーマンション》 ・ リバティかこがわ 2室

【問合せ先】 せいりょう園介護相談室 TEL(079)421-7156/(079)424-3433

老いて人生を締め括る親に込めて ～命より大切なものに気付く心を～

せいりょう園 渋谷 哲

私事で恐縮ですが、この2月3日に父親が87年の生涯を閉じました。肺がんの末期であることを自覚し、昨年末より『何も思い残すことは無い』と言い、葬儀など当面の手配を書き残して、穏やかに人生を締め括りました。

加古川で生まれ、人生の大半を故郷で過ごし、大きな組織に属することなく、個人として他者との間合いを図り、自分の判断力を磨き、多くの政治・経済・行政・地域の方々のご縁を頂き、思う存分に生きて、真摯に生き切った87年だった、と思います。

そして、最後の10日間をバリアフリーマンションの一室で我々家族に身を委ね、小規模多機能型居宅介護と訪問看護とを利用して、自らの生命の営みを締め括る過程を通して、遺伝子では伝わらない大切な経験と濃密な思い出を、子や10代20代の若い孫や曾孫に残してくれました。若い彼らの胸の中に、『命より大切なものに気付く心』の種子が植え付けられたと感じています。

人間以外の動物は、遺伝子で全ての情報を伝えて本能としての種を保存する役割を終えますが、人間には遺伝子情報以外に、社会を形成する為の思想を伝える大切な役割があります。

遺伝子を伝える役割が残る50歳までの人にとっては、命が一番大切なものであっても、遺伝子を伝える役割を終えて65歳を超えた高齢者には、自らの命と引換えに、遺伝子では伝わらない思想や社会性を伝える、大切な役割が残っています。高齢者が人生を締め括る最終の場面には、命より大切なものを伝えるメッセージが潜んでいることに気付きたい、と願います。

この度の父親を見送る過程で、看取りの介護をする家族を支える医療と看護と介護の大切さを実感し、心より感謝の念を抱きます。ドクターやスタッフのアドバイスとサポートに支えられ、若い孫や曾孫が安心して、徐々に消えいく命の側で同じ空気を吸って過し、逝く姿を見届けて死後にも在る命を感じ取り、棺の側で静かに眠っていました。

『命より大切なものに気付く心』を持つ医療・看護・介護のスタッフに恵まれたことに感謝し、このようなスタッフが増えるなら、超高齢社会の先行きもバラ色になることを確信いたします。そして、介護事業に携わる私個人にとっても、介護の普遍的な役割を改めて実感させてくれた父親に感謝します。

此れからは、雨にも風にも光にもなって、地上の我々家族やせいりょう園のスタッフや地域の方々を見守ってくれているもの、と確信しています。

介護についてみんなで語ろう会

テーマ「胃ろうのことをよく知ろう」 1月28日(金)

せいりょう園老人介護支援センター
社会福祉士 吉田 知一

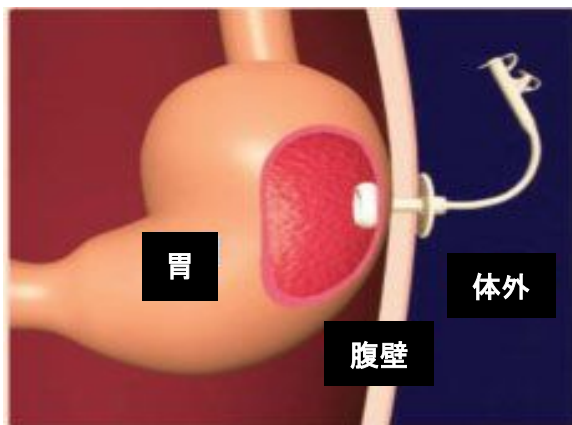
せいりょう園では入所申し込みをしていただく時に、どのような最期を家族が望まれているのかをお聞きしています。老人ホームは入所される方にとって終の棲家となる生活の場所です。最期まで生を全うしていただく為に、本人の死について考えていただいています。ただでさえ葛藤するようなことをお聞きしているのですが、胃ろうをされている方の家族は、さらに葛藤し悩まれています。胃ろうの方の生活についても家族が考えていた生活とはイメージが違っている場合があることも聞くことがあります。

今回の語ろう会では胃ろうのことについて皆さんとお話しました。

「胃ろう」とは

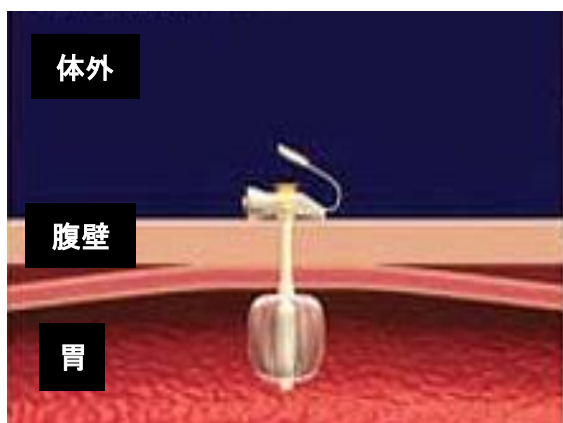
事故や障害が残るなど、なんらかの理由で口からの栄養が摂取困難な患者に対し、人為的に皮膚と胃に穴（瘻孔）を作成、チューブ留置し、水分・栄養を体外から注入させるための処置である。病気により感染症を起こしている場合や、痩せすぎ等の場合には手術に留意が必要です。30年ほど前から普及し、全国には40万人の患者が存在します。

① チューブ型



チューブ型は、投与時に栄養チューブとの接続が簡単ですが、露出したチューブが邪魔になり、自己抜去（引っぱって抜いてしまうこと）しやすく、チューブ内側の汚染が起きやすいのが特徴です。

② ボタン型



ボタン型は、目立たず動作の邪魔にならないために自己抜去がほとんどなく、栄養剤の通過する距離が短いのでカテーテルの汚染は少ないですが、ボタンの開閉がし難いです。

退院後の生活の問題

退院後の生活は、自宅、療養型の病院、施設などの選択肢があります。胃ろうに注入する行為は医療行為となります。医療行為は医師や看護師などの資格を持つ者か自分自身か家族しか行うことはできません。老人ホームにも日中看護師はいますが、夜間帯は介護職だけになります。施設によっては胃ろうの方を受け入れていないところがあったり、人数を制限しているところもあります。

胃ろうの方の介護

高齢となり脳梗塞から嚥下障害、胃ろうになっている方は、麻痺があり認知症の症状があるなど、寝たきりの状態になっている場合が多くあります。さらに毎日3食決まった時間にエンシュアなどの高カロリーの輸液の注入、食間の水分の注入が必要です。痰が飲み込めない場合はその都度吸引が必要になり、自宅での介護の場合は家族介護の体制が必要です。胃ろう部は炎症を起こしやすく、清潔を保つ必要があります、半年に一度は胃ろう部の交換手術をする必要があります。

胃ろうの方の最期

飲み込みの悪い方に対して、誤嚥性肺炎を防ぐ為に胃ろうの手術を行う場合があります。しかし、胃ろうをされている方のほとんどの方は、終末期において誤嚥性肺炎を患います。これは、胃の吸収力や体内への吸収が弱くなる為、輸液を痰として排出しようとしたり、嘔吐します。飲み込みがもともと悪いので排出された痰や吐しゃ物は上手く飲み込めず気管に入り、誤嚥性肺炎を併発してしまいます。また、口腔内に痰が溜まりやすくなる為、こまめに吸引が必要になります。何度も繰り返す肺炎、嘔吐、痰の吸引など、胃ろうの方の最期について、思っていた生活とは違っていた、と訴える家族も多いようです。

なぜこのような問題が起こるのか？

脳梗塞で嚥下障害を患い、飲み込みが悪い状態になる。そこで病院からの説明は「口から食べ物を摂り続けると誤嚥性肺炎を起こします、胃ろうを造らないと死にますよ。」と言われ手術する場合があります。胃ろうをした後の生活がどのような生活になるのか。自宅で介護出来ない場合の受け皿はあるのか。胃ろうの方の最期はどうなっていくのか・・・などの説明が不十分であるように思います。

平成23年1月7日の朝日新聞に笠原小五郎さんという医師が『安易な「胃ろう」やめては』という記事を書かれていました。『早期に退院させたい担当医が「口から食べ物を摂り続けると誤嚥性肺炎を起こしますよ」と言えば、家族はなかなか拒否できない。脳卒中後の症状が安定しないこの時期に、多くの患者は胃ろうを造設される』という内容の記事を書かれています。

感想

去年1年間でせりりょう園の特別養護老人ホームで12人の方が亡くなられています。ほとんどの方は所謂「老衰」という寿命で亡くなられています。もちろん老衰に至るまでに様々な病気や体調の変化はありますが、基本的には内臓の機能が低下していきます。ご飯を食べても消化し吸収する機能が徐々に弱くなっていき、飲み込みも悪くなります。

(次ページへつづく)

吸収出来ない食べ物は異物となり、排泄も出来ない為、本人自ら食事を拒否される方もいらっしゃいます。最後は余分な肉が削ぎ落ち、骨と皮の状態になります。つまり、老衰とは食べることが出来なくなり、自然な形で枯れるように亡くなっていくことをいいます。では、胃ろうの方の老衰とは何でしょうか。

高齢者で胃ろうが必要な方は、脳梗塞などの病気を併発していることもあり、ご自身で判断出来ない場合が多く、手術をするという判断も家族が決断する場合があります。しかし、例えば胃ろうをされたとしても、やはり最期が近づくと自然な形ではない栄養剤を身体が受けつけなくなり、胃ろうを止めるという決断を迫られます。「胃ろうをしないと死んでしまう」と言われ造った胃ろうを止めるという辛い決断をしないといけないということです。

実は、今回の参加者の中に、今日まさに胃ろうの手術をするかどうかの返事をしなければならない家族の方がいらっしゃいました。その方は、私たちの話を聞いた上で「胃ろうをしない」という判断を涙ながらに決断されていました。

私は、入所申し込みの際に、胃ろうの方の最期がどうなっていくのかを伝えるようにしています。それは、家族を責めるものではなく、事実を伝えた上で、その方、その家族にとって最善の判断をこれから出来るようにしてもらいたいからです。

目先のことで判断するのではなく、その人の最期も含めた生活の質や自己実現を考え、助言していくことが求められるのではないかと日々考えさせられます。

【次回の語ろう会 2月「排泄について」 3月「食べる事、飲み込むこと」】

平成22年度第5回グループホーム・小規模多機能運営推進会議の報告

日時 平成23年1月29日（土）14:00～16:00
特養1Fホールにて

意見交換 : 終末期の高齢者の胃ろう造設術について

- ・入院患者で急性期を過ぎ嚥下障害が残った人に「胃ろうをしないと死ぬ」と医師から説明を受けると大半の家族が拒否出来ない。
- ・胃ろうをしても機能低下は避けることは出来ないし、最終的には死も避けられない。
- ・本人、または家族が納得して手術を行ったのであれば、その後の生活を施設等に委ねるのではなく手術を行った医療機関とその家族が責任を持って最期まで見届けるべきである。
- ・胃ろうを造設することで生物体としての維持は可能であるが生活者として充実した日常が得られるのか、口から物が摂れなくなったら自然に死を迎えることの方がベストでは。
- ・手軽に施行可能な手術ではあるが術後に発生するリスクも多々あることも認識すべき。
- ・胃ろう患者にかかる費用については1人年間400万円の公費が必要。その中で自己負担は100万円と高額な出費をしなければならない。全国で40万人の胃ろう患者が居る。その中で植物状態の人が30%を占めており、年間6000億円もの費用が使われている。(新聞資料より)
- ・終末期胃ろうについてもっと深く議論していくべきではないか。



講師 浄土真宗本願寺派善照寺 北村 篤隆住職

本年最初の仏教講話は浄土真宗本願寺派、善照寺 北村篤隆ご住職。以前に一度来て頂いて今回が2回目である。仏教講話が1月お休みで、2カ月ぶりだったのと季節柄体調を崩されている人もあって、参加者がいつもよりかなり少なくてご住職には本当に申し訳なかったです。ご住職が会場に入って来られた時、「あ、お坊さんや！」との声が上がった。案内をしている私は冷や汗が出そうになった。しかしご住職は気にされた様子もなく、「お坊さんと認められて安心しました。普段はジーンズとセーターで過ごしています。今日はこういう格好で来てよかったです。」と軽い口調で始められた。次に今年の寒さの話に移る。「加古川の川面が凍っているのを見てびっくりしました。」実は私も最近利用者さんを迎えに行く時、大きな池の全面が凍っているのを見て、子ども時代を思い起こしていました。

次に年賀状の話に移りました。実はご住職、昨年お兄様を亡くされ、今年は年賀状ではなく寒中見舞いを出され、ここに書かれた内容について話される。寒中見舞いの挨拶のあと、「この世は『諸行無常、禍福は糾(あざな)える縄の如し』(この世の幸不幸は、より合せた縄のように、常に入れかわりながら変転する)です。」お兄さんが亡くなられる前に仲の良い住職との別れ、また親族23人での懇親の集い、奥様の還暦祝いというおめでたもあった。そして『めでたさも中くらいならおらが春：小林一茶』を紹介される。(正月でめでたいことだが、私の周りには色々なことがあって、めでたいという気持ちばかりではない。どちらかという中くらいというところかという意味の句)。(次ページへつづく)

せいりょう園 毎週の行事

月曜日	のびのびルーム (自彊術)
火曜日	のびのびルーム (映画会)
水曜日	のびのびルーム (カラオケ)
	音楽療法
	自彊術療法
木曜日	のびのびルーム (自彊術)
金曜日	ピア/教室
	陶芸教室 造形教室
第2火曜日	折り紙教室
第1・3火曜日	書道教室
第2・4水曜日	お話グループ・福寿草の会

せいりょう園 3月の行事予定

3月 2日(水)	日岡保育園交流会
3月 3日(木)	砂川恵理歌ミニコンサート
3月 5日(土)	園長との懇談
3月 7日(月)	共生の会・仏教講話
3月16日(水)	昼食会 (おでん)
3月19日(土)	彼岸の法要
3月21日(月)	美容の日(従来型)
3月23日(水)	美容の日(ユニット型)
	消防訓練
3月25日(金)	郷土料理(鮭の混ぜ寿司)
	介護についてみんなで語ろう会
	～食べること、飲み込むこと～
3月28日(月)	理容の日

(前ページのつづき)

「『人生は出会いと別れの連続であり、別れはまた次の出会いの始まりである』。亀井勝一郎の言葉に『人生は邂逅(かいこう:めぐりあい)なり』という言葉があります。我々にとって一番大事なことは心と心の触れ合う友情を持てるかどうかです。友情とは友達とのことだけを指すのではなく、対象は隣人でもあり、夫婦、家族でもあります。素晴らしい本との出会いは本との間にも友情は発生するものです。『邂逅』とは人生に一度あるかないかの出会いであるともいわれ、亀井勝一郎にして『私は親鸞にあえがたくして今逢うことを獲たり』と言わしめている。」又、良き師匠(先生)に出会うことが出来るか否かも大切であると話される。では良き先生とは？ずばり！『迷っていることに気づかせてくれるのがよい先生である』。あるラグビーの監督は悩める生徒に『チームワークと我慢で、生きることの重要性和困難さを教え』ラグビーを続けさせたということ話をされた。

最後に高校生の作文を披露された。農業高校畜産科の生徒のもので、優秀賞を獲得した作品らしい。概略は実習の話。鶏のヒヨコを育て、最後に解体して食肉にする授業。世話をし、育てていくうちに情が移り、愈々解体しなければならなくなった時自分は絶対に出来ないだろう。否、やるまいと思っていた。その時が来た。自分がやらなければ誰かがやってしまう。決心した。『自分の勉強の為、病気一つせず、元気に育ててくれてありがとう。』と言って、頸動脈を切りました。『命を有難う！』。人は誰でも「命を大切に」とよく口にする。しかし考えるまでもなく我々は生きるがために実に多くの命を食している。沢山の生命の犠牲のもとに自らの命を保っている。大きな『矛盾』を感じる。矛盾の字の矛(ほこ)と盾(たて)の話をされた。『矛盾』と言うことの意味を分かった時『ありがとう』という心が生まれる。

金子みすずの詩『大漁』を口にされる。

朝焼け小焼けだ大漁だ オオバいわしの大漁だ

浜は祭りのようだけど 海の中では何万の

いわしの吊りするだろう

共に泣き、共に喜ぶ両方を兼ね備えた慈悲の心を持ちたいものです。

有難うございました。

せりょう園待機者状況

<平成23年 2月9日現在>

○入所判定済み者 389名

グループの内訳

Iグループ…134名

IIグループ…155名

IIIグループ…95名

○入所判定済み者の現在状況

在宅143名／特別養護老人ホーム入所中14名／医療機関入院中118名

老人保健施設入所中85名／ケアハウス入居中5名／グループホーム入居中14名／不明5名

○辞退その他

入所1名／死去4名